

目指す学校像	笑顔があふれ、瞳輝く子どもの育成 ～あふれる笑顔 かがやく瞳～
--------	---------------------------------

重点目標	1 自らの良さを伸らし、自立・自走する教育のプロを育成。 2 丁寧な児童理解にもとづく積極的な生徒指導の推進。 3 保護者・地域とともに自ら考え自立する児童を育成。 4 自ら考え、主体的に学ぶ、自立した児童の育成。
------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学 校 自 己 評 価		年 度 評 価					学校運営協議会による評価	
年 度 目 標		年 度 評 価					実施日令和5年2月15日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	(現状) ○教職員が児童に寄り添いながら、学習指導・生活指導にあたっている。 ○長期欠席児童やコロナ禍に関連した欠席者へのオンライン授業を計画的に実施している。 (課題) ○教職員一人一人が、自らのよさを把握し、複数年単位のビジョンをもち、学校経営に積極的に参画していく意識をもつ必要がある。 ○教職員一人一人が、現在よりさらに、児童・保護者・他の教職員の人間性のよさにフォーカスした接し方を意識していく必要がある。	●自らの良さを伸らし、自立・自走する教育のプロを育成。	① 年度当初に、全職員で児童・保護者・職員同士のコミュニケーションスタンス(その人のよさにフォーカスするコミュニケーション)を共有する。 ② コーチング・マインドで接し、職員一人ひとりの人間性が学校運営に発動されるようにする。 ③ R5年度当初担当学年等お知らせ、3学期はR4とR5のマルチタスキングを勧めさせる。(R5.2月)	① 日々の教室訪問、児童観察を通して、職員が児童にコーチング・マインドで接していることがわかる。 ② 自己評価評定初面談で、職員のよさを確認し伝え、個前面談で、ひとり一人の職員が自身のよさを生かして学校運営に参画したことを評価している。 ③ R5・2月3月、現学年の経営に励みながら、積極的に次年度担当の学年児童のリサーチをしたり、次年度学年等のチームで計画したりしている姿が見られる。	○職員間で、職員個々の【よさ】にフォーカスしたコミュニケーションを徹底した。これにより、自らの【よさ】を前面に出し職務に励む姿が多く見られ、同時に、児童の【よさ】を見出し、【よさ】を伸長しようとする場面を多く目にした。 ○2/17に、令和5年度の担任・担当等を発表し、マルチタスキングを進める。	A	○職員同士・保護者対応・児童対応、すべてにおいて【一人ひとりのよさにフォーカスする】【コーチングマインドで接する】を、美園北小学校のコミュニケーション・コンセプトとし、すべての人が磨き合い成長する学校としていく。	校長の学校経営方針から、校長を中心に教職員が一丸となって教育活動にあたっている様子が見え、協議会での授業参観や校内巡視などの際も、どの教室でも担任を中心に生き生きとした表情で授業が進められているのが印象的である。児童数が増加している中、きめ細かな指導の継続を期待している。
2	(現状) ○児童アンケート「友達気持ちになって考えたり、親切にしたりしている」の質問に肯定的な回答をした割合は90%を超えている。 ○「心と生活のアンケート」を定期的に行い、回答の状況に応じて児童との面談を行っている。また、「おひさま相談ウィーク」を設け全児童の面談を行い、悩みごとの解決や問題の早期発見を行っている。 ○保護者向けにも教育相談日を設け、必要に応じて面談を行い家庭と学校が協力して児童の指導が行えるようにしている。 (課題) ○会議等に費やす時間の削減・日課見直しにより、教員が児童や保護者と関わったり、教材研究等に充てたりする時間を捻出する必要がある。	●丁寧な児童理解にもとづく積極的な生徒指導の推進。	① 2学期より日課の変更及び会議等の精選を行い、放課後に学年・学級のための時間を確保し、コミュニケーションを活性化させるとともに、児童に関する正確な情報を共有する。 ② アンケート等の結果や面談等を通じて、学級等の実態を把握し、適切な指導・支援を速やかに実行する。 ③ 児童理解部を月例で行い、児童の小さな変化を全職員で共有するよう進める。	① 週の月、木の放課後を会議・研修日とし、他の3日間を可能な限り、学年・学級の時間として確保できたか。 ② アンケート結果に基づく面談を結果確認から2週間以内に行い、児童理解部組織で情報を共有し、適切に対応できたか。 ③ 児童理解部月例報告での情報を、学年等で共有し、児童の変化を見出そうとする姿が見られたか。	○学年・学級・職員が個人で扱える時間を可能な限り確保した。 ○「アンケート→面談→必要な対応」を確実に実施した。 ○児童理解部会10回(2月14日時点)開催により、児童の情報を全スタッフで共有した。ケース会議20回以上のほか、学年会・職員間コミュニケーションにより、児童の変化に迅速に対応をした。 ○児童個々のニーズに応じた対応を組織で行ったので、すべてのケースが快方に進むこととなり成果を上げた。	A	○職員一人ひとりが、教材研究・教育相談・児童理解等、児童一人ひとりを伸長するための準備時間を少しでも確保するため、通知票発行を3回から2回とする。 ○児童一人ひとりを理解・把握のための会議、研修等にあてる時間は惜しみなく使用する。	教頭や教務主任、生徒指導主任からの児童の様子からの報告から、教職員の指導が児童一人ひとりに響いている様子が見え、いじめ事案では、学校規模の割にごく少数にとどまっております。内容も「嫌がることをいわれる」や「嫌なことをされる」など比較的軽微であることから、教職員の迅速の対応であることがわかる。働き方改革を推進し、ゆとりを持った指導が継続することを期待している。
3	(現状) ○昨年度、学校運営協議会を年3回実施。学校経営(運営)の課題について議論いただいた。 ○PTA 組織や地域がよき学校の応援団となり、本校の教育活動への多大な貢献がある。 (課題) ○【R3 学校評価アンケート】より、児童は学校での出来事を家庭や地域の人に話す機会が少ない。わからないと回答する保護者がどの設問にも1～2割あり、コロナ禍で直接伝えられない環境であった。	●学校運営協議会とSSN等が連動し、学校と地域の一体感を醸成 ●メディアを駆使し、【児童の前を向く姿】 【児童の前の向く姿】 【学校のコンセプト】等を広報し、地域・保護者からの信頼を獲得	① 学校運営協議会やSSNに関する情報を学校だよりや学校HPを通じて発信するなど、広報活動を行う。 ② 学校地域連携コーディネーターがファシリテーターとなり、スクール・コミュニティを充実させる。	① コーディネーターが中心となり、7月末までにSSN等地域と連携・協働し、活動案を作成することができたか。 ① 保護者アンケート「学校の取組等に関する情報発信の充実」において、肯定的な回答が90%以上となったか。	○コーディネーターが中心となり、SC・SSNのほか、地域の組織・人材の活用を積極的にすすめることができた。次年度につながる活動となった。 ○保護者学校評価「学校は、児童の様子や学校の活動等を、保護者・地域に伝えている。」R3:83%→R4:96%。 ○具体的方策を地道に進め、学校・児童の様子を丁寧に伝えることにより、保護者からの信頼を得ることができた。	A	○R4年度得た、地域人的財産を充実拡充するとともに、地域にとって価値ある学校・児童となるよう、内容を充実させていく。 ○児童数・学級数増加への対応を丁寧にしつつ、来校による児童参観・配信による学校広報等、適時充実させていく。	学校運営協議会での内容や熟議について、事前によく打ち合わせがなされ、効果的な話し合いが行われている。 校長を中心として、保護者や地域に積極的に教育活動を発信していることはとても評価できる。アンケートのどの項目も改善がなされ、充実した学校運営がなされていることがわかる。
4	(現状) ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国平均と比べ高い結果である。全国平均と比べると、国語で6、算数で5ポイント上回っている。 ○タブレットを自由に操り、学習課題の解決に向けた調べ学習やまとめにおいて意欲的に活動する児童が多い。 (課題) ○あたえられる学習でなく、自分の力に応じて自主的に学んでいく力をつける必要がある。 ○自分の意見を述べる、自分の考えを広く発信する、調べたこと・まとめたことをプレゼンする等の機会を多くし、力を伸ばしていく必要がある。	●6年間の系統的な学習設計により、学びの自律・探求化・個別最適化と基礎基本の定着を実現 ●ICT活用を探究にとどめず、児童の自主的・積極的情報発信能力を伸長	① 日課変更及び、会議等精選により、教員が放課後に授業準備・教材研究をする時間を確保する。 ② 「問題解決的な学習」を徹底させるためにGIGAスクールにおけるアプリ(オクリンク、ムーノートなど)の効果的な使い方を学校課題研修の中で探りながら、「アクティブラーニングの充実」を図る。 ③ 低学年においてドリル教材を書くことによる基礎基本の徹底を図る。 ④ 中学年はドリルとスタディーサプリを併用し個別最適化学習への移行を図る。 ⑤ 高学年はスタディーサプリ等を活用し個別最適化自律家庭学習を進め、中学校への接続を確実にする。 ⑥ 学校課題研修を通して、ICTを活用した個別最適化・探究的な学びを実現する。	① 2学期日課変更を実現し、放課後教材研究等の時間を増加することができたか。 ② 学期末毎に、ICTを用いた「アクティブラーニング」授業の実施数と効果についての意識調査により、効果を確認することができたか。 ③～⑥ 児童・保護者学校評価「授業が楽しくわかりやすい」の向上・中学年の3学期、高学年通年において、スタディーサプリを積極的に活用している姿を見ることができた。	○保護者学校評価「学校は、児童に課題意識をもたせ、わかりやすい授業をしている。」R3:81%→R4:88%「学校は、学習・生活環境を整えたり活かしたりしながら、工夫して授業をしている。」R3:82%→R4:92% ○児童スタサブアクティブ率:11月30.4% ○Teams等ICT活用と、従来のアナログ技術を併用し、各職員が綿密に教材研究・準備・指導・評価活動を充実させた。学校評価保護者評価の大幅な向上につながっている。	B	○自立した家庭学習を目指し取り組んだが、スタサブアクティブ率30%と低調であった。 ○スタディーサプリ活用法・活用の効果について全校放送でレクチャーするほか、学級単位で家庭学習の充実に向けて指導する。	校内巡視から、教育・学習環境のよさを感じた。1年生から学年を問わず児童がタブレットを使いこなしている姿は、GIGAスクール構想の十分な浸透がうかがえる。また、コミュニケーションアプリを利用した学習やデジタル教科書を用いた授業も数多くなされ、「個別最適な学び」が行われていることがわかる。また、デジタルサイネージという他に類を見ない方法で、児童が活躍している様子を見ることができ、高学年への敬意や低学年への思いやりの心、自己肯定感が育つことが期待できる。徳育に加え教育の充実を図り、児童のさらなる学力向上を期待する。
		●ICT活用を探究にとどめず、児童の自主的・積極的情報発信能力を伸長	① 1F中央階段にプロジェクターを設置し、児童が情報を発信するためのデジタルサイネージ環境を用意する。 ② 授業のまとめ・発展、クラブ・委員会・児童会等の広報、個人やグループ得意分野の発表など、児童が主体的・積極的に映像コンテンツを作成・活用・発表する活動を進める。 ③ 浦和レッズと連携等、校外協力者と児童のコミュニケーションを進め、交流後に感想を収集し、自主的・積極的情報発信の魅力についてHP等を通じて広報する。	① 1学期中にデジタルサイネージ環境とシステム運用を完了できたか。 ② 1週間に1度のペースで、デジタルコンテンツをリニューアルできたか。 ③ 保護者学校評価「学校は、学習・生活環境を整えたり活かしたりしながら、工夫して授業をしている。」90%以上となったか。	○保護者学校評価「学校は、学習・生活環境を整えたり活かしたりしながら、工夫して授業をしている。」R3:82%→R4:92% ○デジタルサイネージにおける児童投稿数70作品(2月14日現在) ○デジタルサイネージでの積極的アウトプットが、宣伝・刺激となり授業の中でも自分の考えを表現する児童が多くなってきていると報告がある。	B	○児童が創造し発信したものをより積極的に外部に広め、児童の自信とし、また、他の児童の活躍に触発され、積極的に挑戦する児童が増えていくよう、システムを改良・改善していく。	